

不登校児童・生徒の人間関係

―「場」を中心とした人間関係の重要性

上原 貴夫

はじめに

ここでは不登校の子ども達（小中学生）を中心とした集団生活キャンプを中心述べる。このキャンプは一九九五年に実施されたものである。この成果についての整理・検討は現在も続けられている。とりわけ、キャンプを経験した小中学生の何名かのものが現実に登校を果たしている。また、なんらかの改善傾向を感じたものも非常に多くにのぼる。この動向については今後とも注意深く検討されていかなければならない。

現在は不登校そのものについての認識も多くの議論にのぼっている段階である。学校についての認識も

問い直されている。このような現状のもとで、「登校」の成否の視点を軸にした検討は、暗に登校を是とする一面的な捉え方であると認識されかねない危惧を持つ。このことについてはここでは触れていない。これは、今後も検討されていかなければならない問題であると考える。

これに対して彼らが登校にいたるまでに示した経過や、心の変化は、これらの問題についてだけでなく、われわれの生活のあり方や心のあり方をも含んだ鋭い指摘と多くの示唆をもたらすのではないかと考える。このキャンプは本年（一九九六）も予定されている。ここで示された課題はそこでも引続き検討され、実践が重ねられていくものである。

したがって、今後の検討課題を持ちながら報告する。

一、不登校についての考え方

不登校について言われてから長い間、未だに効果的な対応が見出せないでいる。それにもかかわらず、現状はますます進行している。現状ではその原因ですら、決め手に欠ける状態であるという言い方が正直な実態であろう。

更に突き詰めればその概念でさえ確定しているかという問題がある。これまで不登校は school phobia といわれる時代があった。一九七〇年ごろにはこのような言われ方をしてきた。しかも、当時は情緒障害のなかでこのように位置づけられ、それが長い時代を経てきた。現在は「登校拒否」ともいわれている。

現在、多くの場合は「不登校」といわれている。そこには先の「登校拒否」の文言がもつ強い拒否状態を避けた意味が込められていると思われる。しかし、今、再び新たな意味を込めてこの「登校拒否」という言葉が言われ始めている。つまり、先の時点ではこのように思われ、そのために使うことがためらわれた言葉であつても、今では、もつと意思を反映させた意味で再び「登校拒否」という言い方がされている。これは先に言われていた段階とは異なる。あるいは強い意思を込めた言い回しが感じられる。それは、学校に対する主体的な拒否の姿勢を示している。つまり、ここには「学校」に対する問いかけとともに、児童・生徒や親などが主体的な意思の反映としてそれを拒否するという姿勢が見られる。また、この場合はもう一つの意味がある。それは子どもの態度として、彼らもまた自分の意思で、時と場合によつては自己の生き方の体現として登校を「拒否」しているという意味も込められている。

このような使い方は当然不登校状態にある児童・生徒を捉える認識にも影響を与えている。あるいは、むしろその児童・生徒にたいする認識の変化を踏まえてこのような用法が現れているともいえる。それは、彼らに対する肯定的な認識である。これまでとかく、不登校の場合に関して学校へ行けない弱い子、あるいは主体性のない子、わがままな子などと否定的に考えられてきた。現在ではこのような考えが彼らを正確に捉えるものではないことは広く認識されている。実際としても彼ら自身、積極性や主体性を持ち、仲間との社会関係を形成している。こうしてみると、不登校の場合は実態以上に否定的に捉えられてきた感がある。

他方で、学校については厳しい認識が示されている。それは学校が持つ意味、あるいは学校へ行く意

味、学校にかかわる意味についての問いかけとなっている。つまり、学校とは絶対に行かなくてはならないところか、あるいは学校とはそもそもそもそもなんであったらうかといった、素朴ではありながら本質を突く問いである。

このように、不登校についての認識は、学校についての認識も含めてかなり転換してきている。しかし、問題は複雑である。問題にかかわる経過は必ずしも一元的にきているのではない。今日の厳しい競争社会では学校やあるいはいわゆる「勉強」が人生に占めるウエイトの大きさが重圧を持つてのしかかっている。単に学歴や、受験のためだけの学力であつても、それらが人生に置いて占める効果の大きさはほとんど誰にも認識されている。それら（人生など）を保証する、あるいは証明する役割を学校が果たしているともいえる。そのために、一方では学校からの自由を認識しながらも、その同じ胸の内では学校に依存した、あるいは学校もしくは学歴が人生や仕事の業績に大きな影響を示していることを知っているというジレンマの状況がある。つまり、学校からの自由を認識しながらも、学校に束縛され、そこから離れられない現実が感じられる。

二、不登校の現状

(1) 全国の状況

表からもわかるように全国における登校拒否児童生徒は年々増加する傾向にある。文部省では「学校基

本調査」を毎年実施し、その中で「学校ざらい」を理由として、年間五〇日以上休んだ者を調査している。平成三年度からは三〇日以上にまでわたる者も対象として調査している。

それによると、小学校でも、中学校でも年々、増加してきている。それは年間三〇日以上欠席者も五〇日以上欠席者でも同様である。平成六年では小学校では三〇日以上欠席者は一五・七八六人、五〇日以上欠席者は一二・二四〇人である。中学校ではそれぞれ六一・六六三人、五一・三六五人である。その年の小学校のそれぞれ〇・一八％、〇・一四％となる。中学校では同じく一・三三％、一・一〇％となる。年をおとしてみるならば小学校では漸増傾向であるが、中学校では平成五年から一％を越えている。年間三〇日以上欠席者でも一・二四％になり、一・二〇％台となった。しかし、それが六年には先に示したように一・三二％に急増している。

(2)長野県の場合

「グラフ1」からわかるように長野県下においても全国と同様に年々増加する傾向にある。高校生では平成四年度から減少傾向にあるが、小・中学校ではむしろ三年を含めて、この頃から増加が急となっている。ただし、三年からは対象を年間三〇日以上欠席者を含めることになっている。しかしながらこのような状況を考慮しても増加には大きなものがある。理由は明確ではない。

平成六年では小学校で五〇日以上欠席が三六六人、三〇日以上欠席が四四〇人である。同じく中学校ではそれぞれ九八一人、一一〇六人、高校では三〇一人、四六四人である。

小学生について、平成二年から三年では、それまで統計の対象としてきた五〇日以上欠席者で一八七

表1 登校拒否児童生徒数の推移（平成元～6年度）

(人)

年度	小 学 校			中 学 校		
	登校拒否者数	全 児 童 数	比 率 (%)	登校拒否者数	全 生 徒 数	比 率 (%)
平成元	7,179	9,606,627	0.07	40,087	5,619,297	0.71
2	8,014	9,373,295	0.09	40,223	5,369,162	0.75
3	9,652 (12,645)	9,157,429	0.11 (0.14)	43,796 (54,172)	5,188,314	0.84 (1.04)
4	10,449 (13,710)	8,947,226	0.12 (0.15)	47,526 (58,421)	5,036,840	0.94 (1.16)
5	11,469 (14,769)	8,768,881	0.13 (0.17)	49,212 (60,039)	4,850,137	1.01 (1.24)
6	12,240 (15,786)	8,582,871	0.14 (0.18)	51,365 (61,663)	4,681,166	1.10 (1.32)

(注) 1 () 内は、年度間に30日以上欠席した登校拒否児童生徒に関する数値を表す。
2 比率は登校拒否者数の全児童生徒数に対する比率である。

(【青少年白書】より)

名が二九三名となっている。その前の元年から二年では一四八名が一八七名への増加であり、前年比を増加率とみるならば、三九名増で二六％の増加率である。これに対して、二年から三年では一〇六名増で五六％である。その後四年からは横ばい状態である。在籍比としても一年から二年の間では〇・一二であったものが〇・一八へと急増している。長野県におけるこれらの傾向は全国を上回っている。全国の在籍比が二年では〇・〇九で、三年では〇・一一である。在籍比の増加についても、全国では二年から三年にかけての変化は元年から二年にかけての変化との大きな相違はないが、長野県では増加方向で大きく変化している。三年に、三〇日以上におよぶ者は長野県では三五九人である。

中学生でもやはり同様の傾向をみせている。同じく五〇日以上の欠席者で比べてみると、平成二年から三年にかけて急増している。この時、二年に六七五人であったものが翌三年には八六六人となり、一九一人増えている。増加率は二八％である。元年から二年では五四一人が六七五人となるのであ

り、その差は一三四人で、率でも二四％の増である。在籍比では元年で〇・五六であったものが二年では〇・七二となり、三年では〇・九四となっている。在籍比の増加は逐年ではそれほど顕著でなくとも、元年と二年を比べるとその大きな開きに改めて驚かされる。

全国では元年と二年では、むしろ全国での在籍比の方が長野県の場合よりも上回っていた。それも元年では長野県が〇・五六であるのに対し、全国では〇・七一という高率であった。しかし、それが二年ではほぼ全国に近い状態となり、三年では全国が〇・八四であるのに対し、長野県は〇・九四と〇・一も大きくなってしまった。その後は連続して全国を上回っている。

高校生では三年から四年にかけて急減している。それは在籍比においても同様である。昭和六〇年以降多少の変化はあるものの、一貫して漸増傾向にあったものが、ここに来て急減した。それは五年にもほぼ同様であった。三年では四〇一人であったものが四年では二四七人になっている。実に一五四人、三八％の減少である。六三年では再び増加に転じ、人数で五年に二四〇人であったものが六年では三〇一人と六一人増加している。これは率にして二五％の増加である。

高校生では中退する者もあるため、欠席者の人数だけでは正確にはわからないものもある。なかにはいわゆる中途退学となっているケースもあると考えられる。

中学生と小学生を比べると中学生の欠席者が多い。例えば、小学生で六年度の在籍比は三〇日以上の者で〇・二九％、五〇日以上のもので〇・二四％である。中学生ではそれぞれ一・三五％、一・一九％となる。三〇日以上の欠席、五〇日以上欠席ともに実に一〇〇人に一人の割合である。この比率自体、深刻

な様子を窺わせ、しかも在学期間が三年間であることを考慮するとその発生がいかにかがわかる。在籍率でもきわめて大きいことになる。高校生では人数そのものが小さいとともに、三年以降では少なくなってきた。しかし、安定して減少しているのではなく、年によっては増加するという変動をもっている。

全国の比較でみて、長野県は小学生、中学生ともにそれを上回っている。小学生では平成六年では在籍比で三〇日以上の者が〇・一一％、五〇日以上の場合で〇・一〇％上回っている。中学生ではそれぞれ〇・〇三％、〇・〇九％上回っている。中学生ではほぼ全国的な状況と同じであるが、小学生では長野県の方がかなり多いといえる。伸び率としても、長野県の方が速い状態である。

三、不登校を取り巻く状況

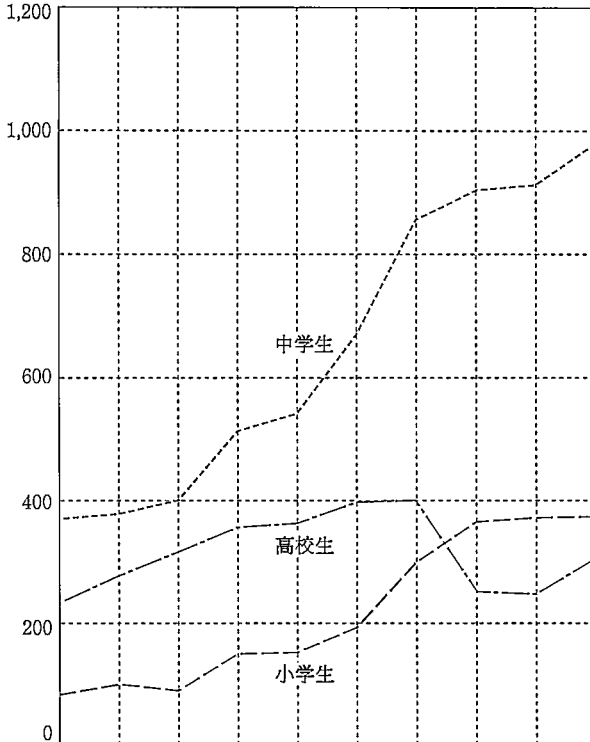
(1) 不登校についての認識

タイトルについて、このように「状況」として示したのは、現在でも依然として不登校にいたる原因については特定されていないのが実状である。それにもかかわらず、不登校は続いている。そのため、明確に原因ということではなく、それを取り巻く状況という捉え方をした。

不登校について、その原因は明確なものが見いだされているとは必ずしもいえない。原因と考えられるものは見いだされるがそれが直接に結び付くものか断定することはなかなか難しいのが実状である。それ

グラフ1 不登校児童生徒の推移

(人) (平成6年度末現在)



年度		60	61	62	63	元	2	3	4	5	6
小学生	人数(人)	82	94	85	143	148	187	359	459	455	440
	在籍比(%)	0.04	0.05	0.05	0.08	0.09	0.12	0.23	0.30	0.30	0.29
	県国	0.04	0.04	0.05	0.06	0.07	0.09	0.18	0.23	0.24	0.24
中学生	人数(人)	369	376	397	514	541	675	1028	1115	1079	1106
	在籍比(%)	0.37	0.37	0.39	0.51	0.56	0.72	1.12	1.25	1.25	1.35
	県国	0.47	0.49	0.54	0.61	0.71	0.75	0.94	1.02	1.06	1.19
高校生	人数(人)	233	272	312	351	360	394	642	405	397	464
	在籍比(%)	0.30	0.34	0.39	0.43	0.43	0.47	0.78	0.51	0.52	0.63
	県国	0.49	0.31	0.32	0.41	0.41	0.41	0.49	0.31	0.32	0.41

(上段は30日以上、下段は50日以上の欠席者)

は、なんらかの原因と、その結果である不登校という状況が明瞭に結び付く現象が見えないことにもよる。しかし、それ以上に、多くの場合は単独やあるいはいくつかの原因が作用して不登校が現れるというだけのものではなく、生い立ちまで含んだ生活状況の複合した作用のもとで現れることによるものであると考えられる。

(2) 児童・生徒における状況

このような状況であるが、不登校の状況を現している児童生徒にかかわる要因として、やはり彼らの生活を形作っている要因に注目する必要がある。それらは、家庭の問題であり、地域の問題であり、または直接的には学校の状況でもある。さらに、本人自身を取り巻く状況も無視できないであろう。

これらを具体的にみるならば、例えば学校ではその中心である「学習(学業)」の面から、クラブ活動や行事、教師・友人を含めたさまざまな人間関係、体罰、いじめなどの問題も要因として浮かび上がる。

また、同様に家庭では家族関係や兄弟関係、親子関係などがある。両親の不和や離婚などは子供達の状況に深くかかわる要因であると考えられる。さらには、家庭では父親や母親の子育てへのかかわりや姿勢、人間関係に関する認識や態度、生活に対する姿勢なども大きく影響する。

不登校のきっかけについて述べる。学校とのかかわりでは「教師との関係」、「学業不振」がめだっている。教師との関係では小学校低学年と中学生でめだっている。これと同様の傾向を示しているのは数は少なくなるが「学校行事」である。学業不振は中学生がもつとも多い、学年進行とともに増加している。同様のものとして「成績へのこだわり」がある。これも中学生など高学年で多い。「クラブ活動・部活動」

も多い。「叱責」なども多くの割合を示している。

友人とのかかわりでは「いじめ・仲間はずれ」が圧倒的に多い。しかも、中学生ではかなり多くなる。同様に「他児からの圧力」も同様の傾向をしめしながら、多い値をあらわしている。これらに続いては「不和・けんか」である。

家族とのかかわりでは「親子関係」が多い。親子関係は全般にどの年齢でも挙げられているが、特に小学校高学年から顕著となってきた。親子関係にも関係している場合もあると思われるが「父母不和」がこれに続いている。「離婚」や「父母以外の家族の不和」も影響している。これらは学年が進んでいる場合に多く発生している。

身体的要因として「疾患外傷」もみられる。「ぜんそく」や「アレルギー性鼻炎・アトピー」がみられる。前者は小学校低学年からあらわれている。後者は小学校高学年から中学にかけてみられる。

本人の感情では心身の状況においては「視線」、「体型」がめだつ。いずれも男女ともに挙げられている。そのほかに多いのは「分離不安」と「被害者意識」である。前者は学齢前においてもみられ、小学校低学年など低年齢に多くみられる。これに対して被害者意識は中学生など高学年に多いという特徴を持つ。また男子よりも女子に多い傾向がみられる。「集団恐怖」も高学年に多い。これらについて、本人のあり方は学年や性別でも違いがみられる点に考慮しなければならぬと考えられる。

「児童相談所における不登校相談の実態と処遇」から示した。

これら全体を通して特徴は最初の学校にかかわる要因でも、また友人問題や家族問題でも学年が進むに

表2 不登校のきっかけ（学校問題）

（複数回答）

学校問題	初発時 学年		学 齡 前		小 学 校・低 学 年		小 学 校・高 学 年		中 学 校		高 学 校		全 体				
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計		
学 校 行 事				3	3	6	2	1	3	3	3	6			8	7	15
給 食		1	1	3	5	8	3	1	4	1		1			7	7	14
宿 題				3	3	6	3		3	3	2	5			9	5	14
当番・委員・役員							1		1	2	2	4			3	2	5
転校・転園	1		1	4	4	2	1	3	4	1	5				7	6	13
組 替 え							1	3	4		1	1			1	4	5
教 師 交 替				2		2	5	2	7						7	2	9
校 則										1	2	3			1	2	3
体 罰				1	1	1			1						1	1	2
叱 責				3	4	7	1	2	3	4	4	8			8	10	18
クラブ活動・部活動				1		1				7	15	22	1	1	9	15	24
教師との関係	1	1	2	10	11	21	4	10	14	9	14	23			24	36	60
進 路 問 題									2		2				2	0	2
学 業 不 振				7	1	8	6	6	12	15	14	29			28	21	49
成績へのこだわり							1	1	6	6	12				6	7	13
そ の 他	1		1	2	2	2	3	5	6	4	10	1	1	10	9	19	
「ある」実数	2	1	3	21	24	45	29	21	50	41	54	95	2	2	95	100	195
なし／不明瞭	3	1	4	15	16	31	16	22	38	22	19	41			56	58	114
初発時実人数	5	2	7	36	40	76	45	43	88	63	73	136	2	2	151	158	309

複数回答では、該当項目がひとつであっても、複数であっても、まず「ある」と答えた児童の実数＝1とチェックし、該当項目がない場合や、有無が明確でない場合を「なし／不明瞭」－1でチェックした。したがって、「ある」と「なし／不明瞭」の合計が全体の実数に一致する。さらに「ある」場合には、その内訳を複数でチェックしてあるので、その内訳の合計は「ある」の実数と同じか、それより多い。比率（％）の計算は、全体の実数を分母とし、それぞれの項目を分子として求めている。（以降）

したがって多く現れている傾向が窺われる。クラブ活動なども同様である。ただし、これが中学校において現れるのは、中学校でのクラブや部活動の運営が小学校と異なることによると思われる。

子ども達の生活をみると、日頃の生活の中でもいわゆる「疲れ」を経験する状態が続いている様子を見ることができ、長野県教育委員会の調査（注6）によると健康状態のうちで「疲れ」を経験する割合は学年が進むにつれて増加している。中学生では「感じるが気にならない」までを

表3 不登校のきっかけ（友人問題）

(複数回答)

初発時 学年	学齢前		小学校・低学年			小学校・高学年			中 学			高 校			全 体		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計		
いじめ・仲間はずれ				9	9	18	12	13	25	22	23	45	1	1	44	45	89
不和・けんか				1	3	4	1	6	7	6	12	18			8	21	29
異 性 関 係										1	1				1	1	
他児からの圧力	1		1	1	5	6	4	6	10	8	14	22			14	25	39
非行児からの圧力							1	1	1	1	2			2	1	3	
そ の 他				4	2	6	3	1	4	4	7	11	1	1	12	10	22
「ある」の実数	1		1	14	19	33	16	26	42	34	48	82	1	1	66	93	159
なし／不明確	4	2	6	22	21	43	29	17	46	29	25	54	1	1	85	65	150
初発時実人数	5	2	7	36	40	76	45	43	88	63	73	136	2	2	151	158	309

不登校児童・生徒の人間関係

表4 不登校のきっかけ（家族問題）

(複数回答)

初発時 学年	学齢前		小学校・低学年			小学校・高学年			中 学			高 校			全 体		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計		
家族・親族の死亡				1	1	5	1	6	3	1	4			9	2	11	
父／母単身赴任				1	1	2								1	1	2	
父／母新規就労				1	1										1	1	
失 業							1	1							1	1	
父 母 不 和				3	2	5	6	5	11	5	5	10		14	12	26	
父母以外の家族不和				2	2	4	3	3	6	3	5	8		8	10	18	
父／母家出				1	1		2	2						1	2	3	
離 婚				2	4	6	4	1	5	6	2	8		12	7	19	
再 婚				1	1		1	1		2	2			1	3	4	
父／母の病気				2	2		2	1	3	1	2	3		3	5	8	
親子関係	1	2	3	4	6	10	9	14	23	12	17	29		26	39	65	
同胞関係				3	3		8	4	12	2	3	5		10	10	20	
生活困窮・サラ金							2	2		9	1	10		9	3	12	
そ の 他				5	7	12	3	4	7	5	6	11		13	17	30	
「ある」実数	1	2	3	17	22	39	35	27	62	37	33	70		90	84	174	
なし／不明確	4		4	19	18	37	10	16	26	26	40	66	2	2	61	74	135
初発時実人数	5	2	7	36	40	76	45	43	88	63	73	136	2	2	151	158	309

二二

表5 不登校のきっかけ（疾患外傷）

（複数回答）

疾患・外傷	初発時 学年		学齢前		小学校・低学年		小学校・高学年		中 学		高 校		全 体		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
ぜんそく				4	4	2	1	3	2	2			8	1	9
アレルギー性鼻炎・アトピー				1	1	2	2	2	1	2	3		3	3	6
自律神経失調症				1	1				1	1	2		2	1	3
てんかん				1	1	1	1	1	1	1	2		2	2	4
自家中毒	1		1	1	1	2							2	1	3
扁桃腺炎									1	1			1		1
その他				3	2	5	1	1	5	5			9	2	11
「ある」実数	1		1	10	4	14	5	2	7	11	4	15	27	10	37
なし／不明確	4	2	6	26	36	62	40	41	81	52	69	121	2	2	124
初発時実人数	5	2	7	36	40	76	45	43	88	63	73	136	2	2	151
				158									158		309

創
る

表6 不登校のきっかけ（本人の感情）

（複数回答）

本人の感情	初発時 学年		学齢前		小学校・低学年		小学校・高学年		中 学		高 校		全 体		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
心身の状況	言語					1	1	1	2	3			2	2	4
	体型				1	1	2	1	3	2	2	4		4	4
	毛髪								1	1	2		1	1	2
	皮膚の色								1	1				1	1
	自己臭								1	1			1		1
視線				2	2	1	1	3	3	6	1	1	5	5	10
集団恐怖	1		1	4	1	5	5	4	9	7	9	16	1	1	18
被害者意識				7	5	12	6	10	16	12	14	26			25
挫折感				1	1	1	1	1	6	13	19			6	15
分離不安	3	2	5	12	14	26	5	8	13	5	6	11			25
経済的物質的不満						1	1	3		3					4
その他				2	1	3	2	5	7	5	4	9			9
「ある」実数	4	2	6	22	25	47	21	27	48	39	47	86	1	1	87
なし／不明確	1		1	14	15	29	24	16	40	24	26	50	1	1	64
初発時実人数	5	2	7	36	40	76	45	43	88	63	73	136	2	2	151
				158									158		309

二
三

舍めると八割から九割以上の者が具体的に疲れを経験している。感じない者は中学一年生で一一・三％であるだけで、他はそのような者は一割以下に留まる。もちろん疲れについては身体的な者も含めて様々な内容があるが、その点を考慮したとしてもかなり多くの児童生徒が疲れた状態にあるといえる。

同様に「悲しい(つらい)」ことを学校で味わうことも多い、内容も多様である。このような経験が「特にない」という者は学年が進むとともに増えている。およそ半数近くの者となっている。このような進行状態自体は傾向としては安心できるが、しかし、成長とともに内面化していくことなどが生じていることも考えられ、そのまま受けとめられない。内面的には「学習や成績」がかなり多くの比重を占め、特に中学三年生ではピークとなっている。低学年では友だちとのけんか、いじめなど生活面の問題が多い。

(3) 子ども達の生活と不登校

これらの調査から浮かび上がってくることは、子供たちが現実にはさまざまな面に耐えながら生活をしているという点である。それは勉強のことから部活などクラブ活動、友だち、遊びなど多方面にわたる。また、場合によっては自分に直接関係したことだけでなく、両親の問題にまでおよんでいる。

このように子ども達は彼らなりの悩みを抱えながら、忙しく学校や地域で生活している姿が浮かぶ。また、学校週五日制が実施されている。そのため授業の過密化が生じている。さらに、地域においても、塾通いなどが多く行われている。中学生など高学年になるにつれて部活なども盛んになり、全般に子どもでも非常に忙しい状況となっているといえる。これによって学校での活動密度が強められている。

その上で、学校生活でも行事などが見直され、次第に行事そのものが減少してきている。その結果、学

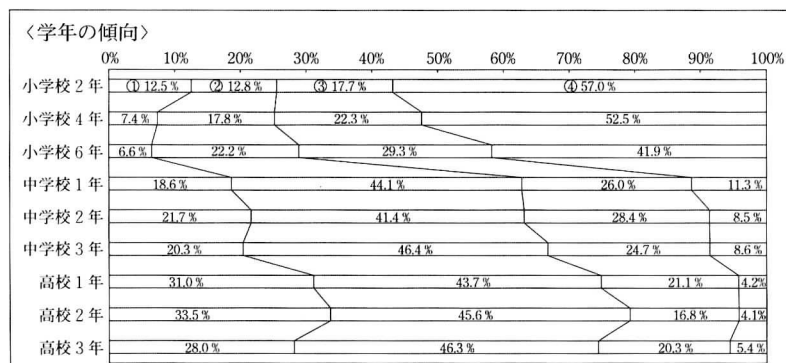
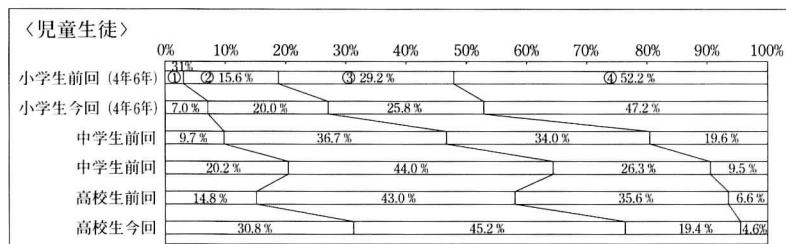
グラフ2 健康状態

⑫健康状態 あなたは、日ごろ、疲れたと感じますか。 中・高(問9) 小(問9)

創
る

- ①毎日のように疲れを感じる。 ②感じることが多い。 ③感じるが気にならない。
④ほとんど感じない。

【調査結果】



グラフ 3 友人関係

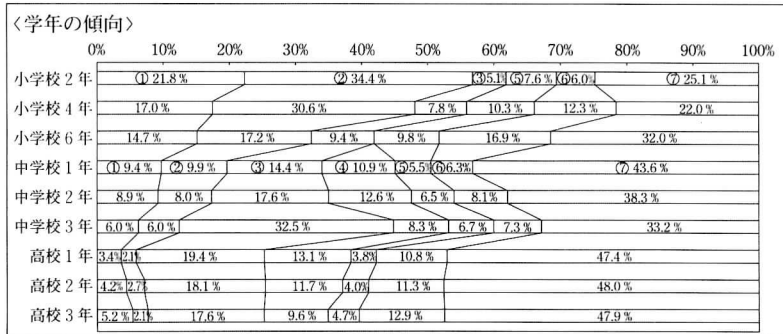
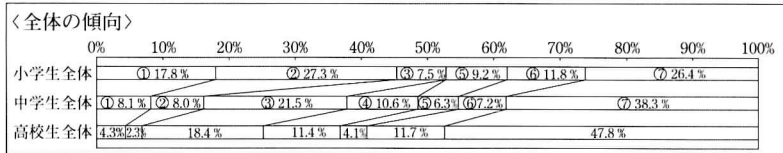
不登校児童・生徒の人間関係

⑭ 友人関係

今の学年になって、あなたが、学校で悲しい(つらい)思いをしたことはどんなことですか。
 中・高(問41) 小(問32)

- ①友達とのけんか ②いじめにあったこと(悪口、仲間はずし、暴力など)
 ③学習や成績のこと ④部活動やクラブ活動のこと(小は、なし) ⑤先生の言葉や行動
 ⑥その他のこと ⑦特になし

【調査結果】



校での生活場面から多様性が奪われ、単調化してきている。核家族化や少子化などの影響により、家庭でも少ない家族や兄弟のもとでの生活となっている。つまり、学校だけでなく、地域や家庭においても比較的变化の少ない単一的な生活となっている。

このような状況のもとで、自己の居場所や活動の範囲に生き詰まったとき、一つの発現として不登校が生ずる。不登校についての事例でもいわゆる追いつめられた状態から不登校に至る状況が述べられている。「不登校に対する指

導のあり方」(一九九四)から事例をみていく。それは、その中の「自分の居場所を見つけ、毎日登校できようになつた栄子(仮称)」の事例で述べられている。そこでは不登校への主因・副因として次のように指摘されている。主因として「キャンプ場で友人との些細な言葉のやりとりを、思い込みの強い栄子は、級友以上に考えすぎ、その解決の糸口を見失っていった。」が挙げられている。副因としては「学習が分からないことを、級友に知られたくないという栄子の気持ち。(学習が十分理解できないことからのコンプレックス)」が挙げられている。

反対に、自由度の高い状況で生き生きとした活動を取り戻していく過程が指摘されている。それは中間教室での事例である。「勇夫(仮称)の中間教室体験」の事例である。このなかで「なぜ中間教室へは行けたのか」について「①自分のペースで動きやすいこと・朝の登校時間など、かなり自由度が高いこと。以後の生活でも、毎日決まっているのはお茶の時間ぐらいであること。」と述べられている。さらにここでは、「②小人数の集団であること・気を使う相手が少ないこと。全員とのコミュニケーションがとり易く、基本的に同じ悩みを持つという連帯感もあつて所属感が持ちやすいこと。」が、挙げられている。これは自由に振る舞う中で、小人数の仲間との連帯感を通じた所属感を持ったことが、生き生きとした活動につながっていることが示されている。

これらの状況はいずれも不登校からの立ち直りを示したものであるが、反面同時にそれは不登校に至る経過を読みとることができるものとなっている。

四、不登校についての対応

(1) 自然における集団生活キャンプ

これまで示してきたような現状にありながら、実際には効果的な方法が見いだせない状態である。今後とも試行錯誤をしながらもその方策が求められていかなければならないが、ここでは昨年（一九九五）行われた集団生活キャンプを紹介しながら、それを通して対応を探っていく。（上原一九九五、九六）ただし、これは一度の試行だけのものであり、冒頭でも述べたように当然、今後さらに検討されていく必要があるものである。

実施されたキャンプの具体的な内容については資料を参照してほしい。ここでは結果を通して考察していく。結果としては参加者の八五%が改善の傾向を示した。その内六名（全体の一八%）の者が実際に登校に向かった。それがキャンプ活動がもたらした直接的な効果であるか明確にはできない。実際としてはおそらくその経験もありながら、周囲の状況も含めたさまざまな要素を通してこのような結果がもたらされたものと考えられる。

キャンプにおける集団生活は後の(3)で示したように実践されたが、その前にキャンプ自体には次のような意味や効果がある。

(2) 自然キャンプの意味

主な効果では次のものがある。

- ① 非日常的体験ができる。
- ② 自然の中での開放感やリラックス感が得られる。
- ③ 集団生活の経験が得られる。
- ④ 目標にもとづいた活動とその成果の達成感が得られる。

この度のキャンプでねらいとされた点は①②③であった。ただし、④について何も無いわけではない。次のように考えた。達成感については企画の目標をそのままあてはめるのではなく、あくまでも個人の成果に基づくものと考えた。そのため、当然「達成感」の内容は個人によって異なる。

このような目標をねらいとしてキャンプの運営にもさまざまな工夫が盛り込まれた。

(3) 実践からみたキャンプ活動

基本的なねらいを「生活」においた。一般に野外活動などでは行事などが企画されている。このキャンプでもそれらが設けられた。しかし、その性格は生活のアクセントとして位置づけられた。

活動は班編成である。各班にはボランティアによるスタッフが二名配置される。各班の特性は、それが固定したものではなく、十分に変更が可能なものであるところにある。活動の時でも、また就寝の時でも、班や部屋が決められているが、それは個人の状況で変更してかまわないものであった。そのため、食事の時と、活動の時、眠る時などでそれぞれ班や相手が異なることも可能であった。

その結果、当然かれらは自由に自己の相手を選んで生活をしていくことができた。このような状態は場

合によっては班自体の意味を無くしてしまうものと考えられる。しかし、班はここでは誰とも関係がでない場合の所屬（居場所）として大きな意味を持っていた。また、より積極的には固定した所屬としての意味を持っていたと考えられる。つまり、班や関係の相手を自由に変更できることは一面では自由度の高い関係ができあがるが、反面では関係の安定度が低くなり、集団の凝集性（まとめり）が低下する。さらに、そのようなことばかりでなく、個人の位置づけすら不安定になり、場合によっては侵されることになる。班があることはこのような状況に対する支えとしての役割を担っていたと考えられる。

(4) 実際の人間関係

キャンプの時の人間関係について示した。（図1、上原一九九六）

この中では不登校の児童生徒も人間関係を形成して生活している。注意深くみるとスタッフが重要な役割を果たしていることが窺える。子どもたちだけで関係が形成されない場合もあるが、その場合にはスタッフがその相手の役を果たしている。

また、大事な点はキャンプ後に登校を始めた児童生徒が必ずしも、明瞭な関係のもとに位置づけられている者だけではないという点である。人間関係においては、多くの場合は関係形成が「多くの相手を対象として」、「持続する関係として」、「堅固に形成される」ことなどが求められる。しかし、人間関係そのものにはさまざまな形態があるものである。一定のあり方で固定されるものではない。それはその人に固有な関係として形成されることが望ましい。この意味からも人間関係そのものを柔軟に考える必要がある。

また、人間関係そのものにおいても関係は相手との直接的な関係においてのみ成り立つものではない側

面があることである。直接的な関係も重要であるが、その関係を取り巻く状況や、あるいは関係を含んだ全体的な状況が重要である。特にこのキャンプの趣旨からいうならばこのことが重要な意味を持つ。必ずしも明確に關係に位置づけられなくとも、また、仮に積極的に主体的なかかわり方でなくとも、所属成員に及ぼす影響や、あるいは反対に一人の成員が受け止める影響には大きなものがある。今回のキャンプ活動における關係形成とその後の参加者の動向はこのことを示唆している。

五、まとめと展望

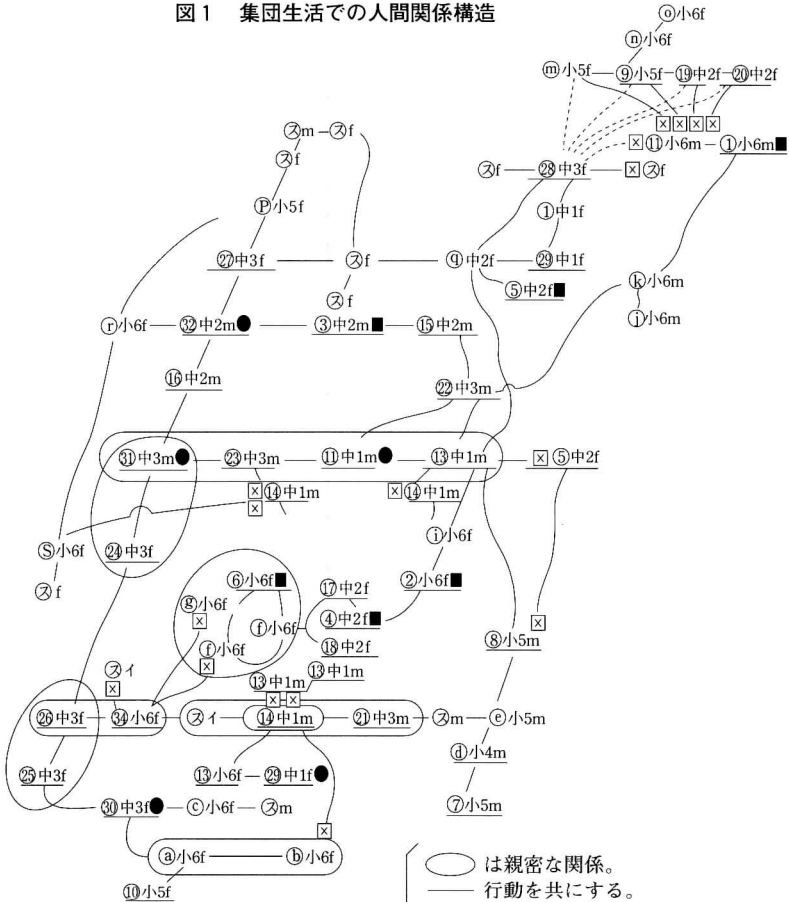
不登校を取り巻く現状には厳しいものがある。依然として年々、増加傾向にある。しかも、個々の不登校のケースのなかには長期化している様相さえ窺える。こればかりでなく、受験問題から「いじめ」の問題も含めて、子ども達を取り巻く環境がますます厳しいものになっている。

そのなかで不登校については社会でも未だに充分な理解を得られていないといえる。そのために、登校しないということ以上に、大きな負担を背負うことが起きている。つまり、不登校という問題についての悩みとともに、周辺の無理解にさらに悩みが増えるという状況である。

各地では不登校に対する中間教室やいわゆるフリースクール、同様の「塾」などが開設されている。親の会なども設けられ各地で活動している。不登校の場合、目に見えた直接的な問題として、中学校の卒業と高校への進学が大きな問題として立ちはだかっている。しかし、最近では受け入れる高校も徐々に拡大

図1 集団生活での人間関係構造

不登校児童・生徒の人間関係



- は親密な関係。
- 行動を共にする。
- 時折行動を共にする。
- ☒ いさかいなど。
- ① 不登校児童・生徒
- アルファベット 登校児童・生徒
- 中—中学生、小—小学生、f—女子
- m—男子、数字—学年、㊦—スタッフ
- ・記号は本文中と対応
- 登校再開、● 変化なし
- ・二重に記号が書かれている場合は、相互に関連する。
- ・途中で帰宅した者も入れた。
- ・キャンプ後追跡できない者は省いた。

してきている。また、登校することにより拘らない考えも広まってきている。その意味では認識と具体的な受け入れの広がりを見ることができるといえる。しかし、未だ十分とはいえず、なお一層、進展していくことが望まれる。

今回のキャンプ活動には二つの意味がある。一つは自然の中での活動である点である。他の一つは人間関係を軸とした集団生活キャンプという点である。自然のなかでの活動は、活動自体が持つ非日常性とともに、自然という良好な環境のもとで開放された活動という意味があった。他の一つは人間関係がもたらす影響である。

今回の活動で印象的であったことは、不登校児童生徒が人間関係を形成する上で、必ずしも特定の人を対象とした人間関係でなくとも、その子にとって意味を持つものがあるということである。それは「関係の場」でもあることを示唆している。具体的な人と人との関係でなくとも、その子を含んだ「場」として形成される中でいわゆる「居場所」を形成している。

「場」としての人間関係の重要性が痛感される。これには二つの意味がある。一つは文字どおり、具体的な人間関係によって形成される。対人関係や集団として形成される「場」であり、そこに加わる成員（児童・生徒）に影響をおよぼす状況である。他の一つは、具体的な関係や集団が存在しないにもかかわらず、いわゆる自己の居場所が見いだされる場合である。それは自己の開放した気持ちや、主張、感情などが受け入れられる状態であると思われる。あるいはなんらかの存在の意味をみいだすことができる状態である。この場合は、関係は「場」として成立しているのであり、場の関係において個人が受け留められて

いるといえる。この度の集団生活では、このような状況と考えられる様子が見いだされている。したがって、人間関係は必ずしも具体的に、対人的な関係だけを考えるのではなく、さらに「場」が持つ意味を認識する必要があると考えられる。

注

- (1) 上原貴夫「不登校児童・生徒の人間関係形成に関する研究」— キャンプ活動を通してみた人間関係形成について— 人間関係学研究 第二巻第一号 一九九五 日本人間関係学会
- (2) 上原貴夫「集団生活における人間関係が児童・生徒の活動性におよぼす影響に関する研究」— 追跡研究— 上田女子短期大学紀要 第一九号 一九九六
- (3) 長野県教育委員会「不登校に対する指導の在り方」一九九四
- (4) 長野県教育委員会「学校不適応児童・生徒に対する指導の在り方」一九九五
- (5) 長野県中央・松本・飯田・諏訪・佐久児童相談所編「児童相談所における不登校相談の実態と処遇」平成六年
- (6) 長野県学力向上企画推進委員会「児童生徒の生活・学習意識実態調査」平成八年長野県教育委員会
- (7) 総務庁青少年対策本部「青少年白書」平成七年度版 平成八年 大蔵省印刷局

